

菊池義武討伐・小原鑑元討滅に大功を挙げて認められるところとなり、筑前宝満岳城督を命じられていた。高橋鑑種が宗麟を裏切った原因については、このころ、筑前の国人への調略を命じられて、これを進めたいところ、宗麟が毛利氏と和睦してしまったので、鑑種は面目を失い、宗麟の矛盾したやり方に不信感を抱いたとか、鑑種の兄一万田鑑相が謀反の疑いをかけられ、親類の服部・宗像氏ともども討伐されたこと、それが宗麟の一万田鑑相の美貌の妻への横恋慕に原因していたことなどがいわれている。

最近では、高橋鑑種が、このころ、毛利氏に筑前西部六郡の支配を認めさせようとしていること、独立大名化への野心〔荒木清一「前掲論文」や、宗麟が見殺しにした弟大内義長時代の鑑種の役割に注目して説明しようとする説〔大分県史「中世篇Ⅲ」〕が出ている。毛利方では、高橋鑑種は大酒飲みの豪傑で、大友勢を物ともせず、神出鬼没の作戦で敵を蹴散らしたという評判が定着していた。



大友宗麟の花押



高橋鑑種の花押

毛利・大友の和議

毛利・大友両家の対立は、永祿七年正月、公方毛利義輝が派遣した聖護院道増らによる長い調停作業がやっと実って講和にこぎつけた。

その条件は、①門司城と規矩一郡を毛利方が支配する。②松山城・香春岳城を破却して大友方へ渡す。③高橋鑑種をはじめとする牢人を大友氏の家臣とし、所領を没収したり、誅伐したりしない。④小早川秀包（実は元就の子）に宗麟の娘を娶せる、という内容であった。

しかし、この和平は長くつづかなかつた。香春岳城の破却と引き渡しが遅れ、毛利氏得意の調略が、豊筑の国人へひそかにつづいていたからである。大友宗麟の知恵袋といわれた家老の吉岡宗欽（長増）らは、「毛利氏が調略をやめないならば、大友方も、防長の旧大内家の人々に蜂起するよう調略しますよ」と抗議している。このころ、毛利元就は苦勞して出雲白鹿城（松江市）を攻略し、ついで、尼子義久の籠る富田月山城を攻めて、永祿九年十一月、これを降し、義久を捕虜とした。

北口の憂うれいを除いた毛利元就は下口（九州）へ露骨に乗り出し、高橋鑑種を宝満山に拳兵させて、立花城の立花鑑載（あはせとく）に調略を行わせて、これをも拳兵させたため、永祿十一年九月から翌十二年十月まで、再び毛利・大友両家の大戦争が始まる。

四 大坂山の戦いと三岳の戦い

永祿七年（一五六四）の和平協定で、毛利氏が豊筑から手をひいて、出雲の白鹿城から富田月山城へ尼子義久を追いつめている間、国人たちは大友氏に降礼をとって、隠忍自重していた。

永禄四年以来、人質を出して大友氏に従ってきた長野筑後守（種信カ）が、永禄八年五月、敵対するようになったため、大友宗麟は田原親宏・親賢の国東郡衆を送って、三か月も長野里城を攻め、さらに奥城の三岳を攻めて降伏させた。

西郷隆頼の再挙

永禄十一年四月、三岳に拠る長野・田原勢を包囲する形で、門司城督の仁保隆慰が西大野宮山（小倉南区山本）に、また、大内家の妙見岳城督で、永禄四年毛利方に寝返って松山城に籠城していた杉因幡守降哉と、永禄二年八月に挙兵し失敗して中国へ亡命した西郷遠江守降頼が大坂山（飯岳、標高五七三〇）に挙兵した。宮山や大坂山は、豊後勢の攻撃を受けて、間もなく陥落し、西郷隆頼・杉降哉は降伏した。この年七月のことであろうか、西郷隆頼は、大友宗麟から豊前国内で五〇町分を預置あずかられている。ついで両田原軍は杉七郎重良（杉重輔の子）の籠る松山城を包囲した。

三岳の合戦

ここに至って、北口の尼子氏の脅威きょうゐから解放された毛利氏が大軍を九州へ動かすことになり、元就の子である小早川隆景・吉川元春が海陸の兵を率いて、まず長野氏と田原勢の籠る三岳を包囲した。

長野氏は三岳と等覚寺（荻田町山口）の要害を嚴重にして楯籠ったので、毛利勢は両城の中間に宮尾城を築き、三岳城内に調略を行って寝返りする者を待った。やがて、三岳城内に意見の対立が生じ、毛利軍を引き入れる者があって、惨たんたる戦鬪が展開され、長野兵部少輔・同左京は戦死し、男女数千人が殺害されたと『到津氏覚書』は伝聞を記している。等覚寺城も間もなく陥落して、豊後勢と共に、長野三河守助守も豊後へ逃亡した。このため、豊前の西半分は毛利氏の支配するところと

なった。

毛利両川軍は三岳から、麻生氏の拠る山鹿を経て宗像・立花へと進出し、立花城を包囲した。

永禄十一年十一月、大友氏と和睦して臣従していた秋月種実が、毛利氏の調略によって寝返り、千手隆惟を急襲して殺害した。毛利勢は馬見岳（嘉穂町、九七八〇）の要害を嚴重にして、高橋鑑種と連絡をとって比筑後方面を抄掠し、久留米の高良山に出馬していた大友宗麟の後方を遮断しようとした。

五 大友・毛利の立花城争奪戦

永禄十一年（一五六八）九月、毛利方は一〇万余の兵をもって立花城を遠巻きにした。大友方も豊筑の軍勢五万五八〇〇余を送って後ろ巻きした。これは『大友興廢記』の数字であるが、毛利方の『江田文書』（『萩藩御』
『問』所収）によると、毛利方五万余騎、大友方一二万八〇〇〇と数字が逆となっている。いずれにせよ、中国・九州各地から空前の大軍が立花城の中に置いて対峙したのである。

立花城は、建武年間（一二三四—一三三六）、大友氏泰の兄で、名代を務めた大友貞載を祖とする大友一族が、筑前国の大友氏の所領であった糸島・博多・香椎付近を管理し、立花城に拠ったことから立花氏を称したという。十五世紀前半以来、この地を大内氏が何回か侵したから、大友家では、掟書で、この城を取るか否かは熟慮が必要であると説いている（『大友義隆』
『系々』）。大内義興の時代から、国東の領主田原親述・親董父子が、大友氏と対立して、大内家を頼って亡命生活を送っているが、その十六